

令和7年8月19日
(2025年)

常任委員会行政視察報告書

委員会名	文教市民常任委員会
視察委員	委員長 西岡 友和 副委員長 後藤久美子 委 員 梶川 文代、山根 建人、村口久美子、江口礼四郎、 野田 泰弘、有澤 由真、橋本 潤
視察期間	令和7年7月23日（水）から7月24日（木）まで2日間
視察内容等	1 視察先及び調査事項 1日目 神奈川県鎌倉市 学びの多様化学校（由比ガ浜中学校）について 2日目 東京都足立区 足立区立郷土博物館の管理・運営について 2 調査の概要及び意見（鎌倉市） (1) 鎌倉市の主な事業概要 ア 由比ガ浜中学校の概要 文部科学省が指定する「学びの多様化学校（不登校特例校）」として、令和7年4月に開校。定員を30名（各学年10名）程度とし、一般の中学校より授業時数を減らし、自分のペースで学べる柔軟な教育課程を編成しているほか、各教科の教員や養護教諭、スクールカウンセラー等を配置している。また、学区は市内全域で、他の市立中学校と同様にデリバリー式給食を提供している。 イ 対象となる児童生徒（転入学のてびきより抜粋） 次の(ア)～(ウ)のすべてに該当する児童生徒のうち、教育委員会が認めた児童生徒 (ア) 鎌倉市内に在住している児童生徒 (イ) 不登校状態または不登校傾向にある児童生徒 (ウ) 由比ガ浜中学校で学びたいという思いのある児童生徒 ウ 特色 (ア) 生徒の安心を育む充実した体制 定員30名に対し、約10名のスタッフ（教員・スクールカウンセラー等）

	セラー等)が、少人数をいかし、生徒一人一人への丁寧な支援を行っている。 (イ) 自分のペースで学べる柔軟な教育課程 年間授業時数(既存の中学校は1,015時間)を770時間に削減し、朝の時間のゆとりや、他の学校と時間をずらす等の配慮から、登校時間を遅めに設定している。 (ウ) 「個別最適な学び」と「協働的な学び」 生徒自身の学びたい気持ちを大切にし、「学習者中心の学び」を実施している。また、生徒同士の関わり合いや学び合い、地域の方々を始め多様な他者と協働しながらの学びを大切にしている。 (エ) 新教科「ULTLA」 鎌倉市教育委員会が不登校児童・生徒を対象として取り組んでいる「かまくらULTLAプログラム」の要素を取り入れ、新教科「ULTLA」として再設定し、授業時数を140時間に増やし、興味関心領域や思考スタイル、認知特性等を把握するためのアセスメントの実施と丁寧なフィードバックで、自身を肯定的に捉え直す機会を作っている。 (オ) 保護者へのサポート 教員やスクールカウンセラーが定期的に面談を行い、保護者に寄り添い、連携することで、生徒を共に支える体制を作っている。また、定期的に懇談会等を実施し、保護者同士で安心して話ができる場を作っている。その他、保護者を対象に、生徒の理解や関わり方について、専門職による講座等を実施している。 (2) 主な質疑内容 ア 卒業後のアフターフォローはどのように行うか イ 職員にかなりの負担があると想像できるが、働き方に問題はないか ウ 総授業時間が短縮されているが、文部科学省の定めと整合しているか エ 不登校児童・生徒の総数は何人か、また、入学者の選考はどのように行っているか オ 進路についてはどのように指導するのか カ 鎌倉市立御成中学校の分校として設置されているが、教育内容は同じか
--	--

- キ 小学校にも不登校特例校を設置する予定があるか
- ク 通常学級とはどう連携しているか

(3) 委員会としての所感

- ア 17万人口、約1万人の児童・生徒数の中で、最大30名に対応できる施設であり、その役割は素晴らしいものであると考えるが、市内不登校生徒全体の支援には十分でない可能性がある。
- イ 通学開始後の心理的・学習的フォローや、通常校への復帰支援、また、卒業後のフォローなどの仕組み整備が今後の課題と言える。
- ウ 吹田市でも、不登校支援や多様な学びを考える際には、当該施設で学んだ創意工夫や制度設計から、学ぶべき点が多いと感じた。

(4) 委員の所感

「明日も来たくなるような学校」作りを目指して、「個別最適な学び」、「協働的な学び」の実践を積み重ねられている。吹田市でも同様の目標を掲げており、参考にすべき点が多くある。県が予算を付けているので、市が単独で特例校を一から作るのは困難だが、安心できる居場所や相談できる場所作り、カリキュラム、保護者との定例懇談会など、運営面で取り入れられる点があると感じた。

3 調査の概要及び意見（足立区）

(1) 足立区的主要事業概要

ア 施設概要

RC鉄筋コンクリート造、地上3階・地下1階建て（展示空間は1、2階）、最高軒高8.8m、最高高さ15.3m、地下7.7m、敷地面積1,650㎡、建築面積989㎡、延べ床面積2,561㎡

イ リニューアルまでの経過、背景等の概要

開館以来39年が経過し、空調設備、収蔵設備及び展示設備の老朽化が進んでいた。また、平成24年から本格的に開始した「文化遺産調査」の結果、区内から多数の美術品が発見されたことにより、貴重な資料を適切に展示、保管する必要性が生じたため、「郷土資料館から『美術博物館』へ」をコンセプトに改修を進めることとなった。

- ウ リニューアルに当たり活用した補助金等の有無
なし

エ 具体的な運営手法

	直営で、館長（係長1名）、事務職員4名、学芸員6名（うち常勤職員3名、会計年度任用職員3名）、会計年度任用職員2名の計13名体制で運営している。月曜日は休館で、休館日は半数の人員で運営している。なお、学芸員は歴史、民俗、美術の3分野に2名ずつ配置している（常勤職員及び会計年度任用職員1名ずつ）。 オ 運営経費 令和7年度当初予算 129,328千円 カ 1日の稼働運営スケジュール（例） 8：30 職員出勤、開館準備 9：00 開館 事務職員は日常の管理運営、広報物作成、契約事務等を行い、学芸員は展示構成の検討、レファレンス対応、文化遺産調査、講師派遣対応等を行う。 16：30 最終入館 17：00 閉館 17：45 職員退庁 キ 利用者等からの声 区民及び近隣市からの来館が圧倒的に多く、リニューアル前を知っている方からは、エントランスで雰囲気が変わったことを感じたという声が多い。また、改修期間が2年4か月に及んだため、再開を待ち望んでいた声も多く、4月26日のリニューアルオープン以来、来館者数は1万人を突破した（リニューアル前の来館者数は年間で1万5千人から2万人）。さらに、収蔵機能が更新されたことにより、資料の寄贈申込みも多く寄せられている。 ク 今後の課題 美術館内の収蔵庫以外に外部倉庫を2部屋借用しており、今後も資料の寄贈申込みが続くことが想定されるため、保管場所の確保が課題。また、長年勤めてきた学芸員の退職に伴う後進の育成にも課題がある。 (2) 主な質疑内容 ア リニューアルに掛かった費用及び調達について イ ランニングコストとの費用対効果など、財政運営について ウ 東日本大震災の影響はあったか エ 故宮博物院など、他の博物館との連携について オ リニューアルから2か月で来場者数が1万人を突破したとのことだが、ソフト面での工夫や、リピーターを増やす工夫をした
--	---

か

カ 児童、生徒への見学機会提供などの対応は

キ 運営について、外部委託という発想はあったのか

ク 学芸員の後進の育成や、成り手不足などの問題への対応は

ケ 古民家を改装した施設などはあるか、また、ある場合はその施設の運営費用は区が支出しているのか

コ 資料の保存、廃棄方法などについて、デジタル保存などを行っているか

(3) 委員会としての所感

ア 令和7年4月に「美術博物館型」への大規模リニューアルを実施したばかりであるが、開館から3か月で既に1万人以上の来場者が訪れている。しかし、改修費用は18億円を要しており、費用とその効果という面において調査する必要がある。

イ 足立区立郷土博物館と吹田市立博物館は、共に地域の歴史や文化を市民に届ける拠点として、市民参加型・体験型の展示や運営を重視する点で共通している。

ウ 足立区立郷土博物館の刷新による郷土と美術の融合や、企画展の実施は参考となった。吹田市として、これらの成果を踏まえ、何度も訪れたくなる、楽しみながら学べる博物館作りを進めていく。

(4) 委員の所感

自分の街の歴史や文化、美術を知ることができ、愛着が湧くというコンセプトが伝わるユニークな展示内容だった。展示内容をフレキシブルに変えられる工夫や、庭に憩える場があるのが良いと思った。吹田市立博物館も老朽化でリニューアルの時期を迎えており、都市計画道路との関係も踏まえ、市立博物館の位置づけやコンセプト、どの規模の改修が必要なのか、議論が必要だと考える。